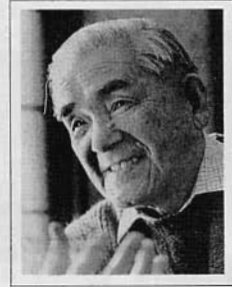


哀悼

平和運動の理論的支柱として活躍した具島兼三郎氏



柔道部OB会最長老
具島兼三郎（中2回卒）
先生のご逝去に心より
哀悼の意を表します。

具島先輩を偲んで

中島 俊治（高7回）

福中福高柔道部OB会最長老の具島兼三郎先生（中2回卒99才）が、平成16年11月12日に亡くなられました。ここに哀悼の誠を捧げ、心からご冥福をお祈り申し上げます。先生は、大正15年に柔道部後援会を創設されるなど、草創期の福中柔道部育成に大きな役割を果たされました。後に、九大法学部長、長崎大学々長を歴任され、戦後の平和運動の支柱として、大いに活躍されたことは、ご承知のとおりですが、先生を陰で支えた、先生の人生にとって最も大きな存在であった溝口外科病院々長夫人敏子さんとかかわりについてご紹介させていただきます。先生を偲びたいと思います。

先生は、七人兄弟の次男で、生家は呉服町近くの桶屋町にある酒樽や醤油樽をつくる家内工業でしたが、父は先生が物心ついた頃には病いの床に就いていて、間もなく亡くなり、父の弟も桶屋さんで子供がなく、先生はこの叔父の養子にもらわれて、桶づくり職人になることを

求められます。勉強が良くできて、中学に行きたい先生は、小学校卒業間近かに、養父に中学を受験してもよいかと、おそれるおそれる伺いをたてますが「職人に学問は要らん。」と一言下拒絶されます。これを救ってくれたのは小学校の担任の先生で、何度も何度も家に足を運んで養父を説得してくれました。

晴れて福中に入学しましたが、しかし一年生の終り頃養父も亡くなってしまい、学校はやめるしか仕様がなくなつて、一年生最後の登校日、勉強をつづけられないくやしさに、胸のはり裂けるような思いで校門をくぐり、クラスメートに最後のあいさつをする時、人前も憚らず「ワー！」と大声をあげて泣き崩れてしまいました。

中学をやめて間もなく、失意の中に過していたある日、見知らぬ婦人が先生の家を訪ねてきます。この人が溝口病院々長夫人の敏子さんで、クラスメートだった溝口清君のお母さんです。

「あなたのことは、清からも中学の先生方からも聞いて、よく知っています。あなた、勉強を続けたいとおもうなら、わたしの家に来ませんか。」と申し出られ、養母も「溝口さんところへ行って、勉強させてもらえ。」ということ、すぐに復学の手続きをして、学校も一度退学したのを退学しなかつたことにして、二年生に進学させてくれました。

溝口外科病院は洲崎土手町にあった有名な病院で、院長先生は福岡県医師会長で、九州医専（現久留米大医学部）の創立準備の中心となった人ですが、夫人もスケールの大きな人で、廃娯運動の先頭に立って、田舎から騙されて遊廊に売られてくる娘たちが逃げてくるとこれを匿い、逃してやりました。これが度重なつて、ある時、遊廊側が暴力団を使って、外出途上の夫人を襲撃させ、半殺しにします。着物は引き裂かれ、全身血まみれで病院に担ぎ込まれましたが、後日夫人は先生に「暴力は強そうに見えるが、実は強くないのよ。暴力に訴えなければならぬのは、道義的に弱いからなのよ。暴力を振るえば、女だから怖がつて縮みあがるぐらいに思っているから、おかしいね。」と話しました。

中学にやつてもらっただけでも有難いと思つていたのに、高等学校にも行かせてもらい、大学受験は医学部に

して、少しでも恩返しをと思つていましたが、夫人に「人間の病気を診るのでもいいが、国家や社会の病気を診る学問をやつたらどうか。」と勧められて、できたばかりの九大法学部に進みます。夫人は、学問は机上の空論であつてはならず、実際に社会の改革に役立つものでなければならぬ。ただ立身出世や月給をたくさんもらうためにするものではないと、学問をする者の基本的な心構えを説き、先生の心に強く焼きつきました。夫人は「学問は、あんなだけ知つても何もならん。皆がそれを知らない、世の中は良くなりほしくない。」と、病院で看護婦さんや女中さん、入院患者の中の希望者を対象に、社会教室を開き、先生に話をさせました。

大学卒業後、同志社大助教授を経て南満州鉄道（満鉄）調査部に勤務していた昭和17年、日独伊三国軍事同盟締結反対を説いたため憲兵隊に捕えられ、冬はマイナス20度を越えて、風邪を引けば死ぬと言われる満州の酷寒の拘留場で2年8ヶ月を過ごし、終戦間近に解放され、九死に一生を得て日本の土を踏みます。戦後は、読売新聞の論説委員をやつた後九大教授になり、出版したファツシズムという本がベストセラーになつて、野間先生に手に入れます。溝口先生夫妻も、病院を息子さんたちにゆづつて、先生の家の近くの小高い丘の上にある別宅に隠居しておられました。近くに引越して来たあいさつに何うと、御夫妻はとも喜ばれ、家を見たいという夫人は、足をくじいて歩けなかつたので、先生はリヤカーで迎えに行きます。先生の家に着いてから夫人は「家の中は這えるから、自分で見る。」と、家中あちらこちらと這いながら見てまわられました。

「いつか、こうゆう日が来ると思つて楽しみにしていたが、とうとうその日がやって来たねエ。」夫人は、いろんな感慨をこめてポツリと言いました。帰り途、夫人は上機嫌で「九大の教授にリヤカーを曳かせてホントにすまんなア。アハハハ。」と楽しそうに笑いました。先生も心底から嬉しいと思いました。

（自伝「奔流」より、中島俊治記）